

シンポジウム

学童期における早期対応と人格発達の可能性

学童期の支援

—TEACCHプログラムの考え方とその応用—

岡田 祐輔

(西多摩療育支援センター上代継診療所)

私は東京の西多摩地域というところで、診療と、教育や福祉に関連した支援をする機関に勤めております。もともとは小児科医なのですが、たまたま機会がありまして、2003年にノースカロライナのシャーロットというところのTEACCHセンターで学ぶ機会をいただきました。ここでお話しさせていただくことになったのも、そのためであろうと思います。

きょうは主に、学齢期早期の高機能の方への支援ということで、その中にTEACCHの考え方をどのように生かすことができるのかということを中心に、私たちのところでの取り組みも一部織りまぜて御紹介をさせていただきたいと思います。

私自身はただの臨床家ですので、あまり難しい理論的なお話はできないのですけれども、支援の技法ではなく、総論的な大きな考え方をここではお伝えしたいと思っています。

初めにTEACCHというのは、今から35年ぐらい前になりますが、アメリカのノースカロライナ大学でエリック・ショブラーらによって始められた、日本語に訳すと、「自閉症と関連するコミュニケーション障害の子どもたちのための治療教育プログラム」ということになります。日本語でトリートメントというと治療というふうに訳すのですが、これは狭い意味の治療ではなくて、多分皆さんにイメージしていただくとすると、髪の毛のトリートメントのようなことだろうと思います。当初は小児期の支援が中心でしたし、比較的重い方の支援に積極的にかかわっていましたが、だんだん高機能とかアスペルガーの方、そして成人期の方への支援も積極的に行うようになってきました。さまざまな何とか療法というのがありますが、TEACCHは

そういう一つの治療技法ではなくて、自閉症の人たちの支援をするための包括的な支援プログラムというふうに言えると思います。恐らく日本でいうと、教育や福祉や就労や、そういうものを全般的に含んでいるものということになるでしょう。

TEACCH

Treatment and Education of **A**utistic and related Communication handicapped Children

ノースカロライナ州内に9カ所のTEACCHセンターがあるのですが、それぞれの地域で自閉症の方、そしてその家族や支援者のためにスタッフが働いています。私が研修をさせていただくときに、初めにこのTEACCHの6つのアイデアというのを教えていただきました。第1番目には自閉症に対する理解ということです。これは自閉症の特性の理解ということもそうですし、脳の情報処理過程が異なる、基本的に違いがあるという理解も重要なことになります。第2番目に評価から始めるということですが、これは実際のお子さんの観察を通して、評価をもとに支援を組み立てるということになります。そして、もちろんさまざまな知能検査や発達の検査も使いますが、インフォーマルな評価ですね、生活の中の評価を重視するということも挙げられると思います。第3番目には、実証された理論に基づくということです。厳密な意味で統計学的に実証されるというのはなかなか難しいことがありますが、さまざまな理論の中からよいと思われるものをピックアップして取り入れています。皆さん御存じの構造化された指導、支援というのも、その一つだと思います。第4番目に、個別化して考えるということです。これはよく誤解を受けるのですが、型にはまった画一的なやり方をしないということで、

決して1人でやるということだけではありません。興味や関心、強みを生かすことであるとか、集団の中でも一人一人に合わせた援助や支援をすることです。違った言葉で言うと、支援者が柔軟になることというふうにも言えると思います。5番目には、自立を重視するということです。ここでいう自立というのは、一つ一つ指示されるのではなく、自分で始めて自分で終わるといようなことであり、成人期には大変重要なスキルになります。当然理解していないと自立してできませんし、そのためにみずから情報を取り入れるための支援、これを重視していますし、般化をさせるための工夫をしていくことになります。最後に、両親と専門家が協力するということです。両親はそのお子さんに対する専門家ですので、両親への支援と同時に自閉症の専門家との理解の共有ですね、お子さんとの理解を共有するということ、これを重視します。そして、両親と協力することは、家庭や社会への般化にも大変役に立つことです。

支援を考えるときに、ここに挙げた二つの考え方があるかと思います。一つはボトムアップの考え方で、これはできないところをできるようにするようなアプローチとも言えると思います。私は医療の現場にいる者ですが、医療や教育は従来こちらの考え方が主体であったろうと思います。これは発達を積み重ねるということにもつながるかもしれません。もう一つはトップダウンの考え方です。これは現在の力でもうまいくいくためにはどうしたらいいかと、そして、そのために必要な支援があれば、それをきちんと入れましょうというようなことです。縦に伸ばすというよりは横に広げるような考え方になると思います。TEACCHの考え方としては、恐らく両方を使うわけですが、どちらかと言うとトップダウンの考え方に近いのだらうと思います。何を教えるべきかをよく検討して、新しいスキルも教えるのですが、自閉症を何か違ったものに変えようとかそういうことではなくて、自閉症のままにうまくやっていくことを考えています。そのためには当然個人のアセスメントをきちんとしなければいけませんし、どういう部分で支援が必要かということを十分に考慮する必要があります。わかること、成功すること、積み重ねることで、その結果、いつの間にかできていることも多いわけです。

自閉症の方でも当然発達をしていきますので、その間に失敗を重ねるのではなく、成功を積み重ねることが重要なのです。

ボトムアップとトップダウン

ボトムアップの考え方

- できないところをできるようにする
- 定型発達を基準にして、遅れをとりもどす
- 発達を積み重ねる
- できるようになったらやる

トップダウンの考え方

- 現在の力でもうまいくにはどうしたらよいか
- どこに、どんな援助が、どのくらい必要か
- 成功を積み重ねる
- 自閉症の特性や自閉症の発達経過を考える

TEACCHのサービスについてここに挙げてみました。

TEACCHのサービス

- 診断、評価
- 療育セッション
- 学校へのコンサルテーション
- 教師や専門家のトレーニング
- 就学前児のクラスルーム
- ソーシャルグループ
- 親のためのサポートグループ
- ペアレントメンタープログラム

TEACCHのサービス

- 就労支援プログラム
- 施設へのコンサルテーション
- 居住プログラム
- 医療相談クリニック
- 研究活動
- さまざまな機関との連携

これらは9つのTEACCHセンターを中心に行われています。一つは診断評価ということです。自閉症や自閉症が疑われる方は、各地のTEACCHセンターに紹介されてきます。診断のための評価は、丸1日かけて十分に行われますけれども、保護者への説明とその後の詳しい報告書を通して、具体的な支援方法の提示やさまざまな情報提供が行われます。その後の両親との協力関係を築くことや、さまざまなサポートを利用するという意味も含めて、

この診断評価のプロセスを非常に重視しています。

療育セッションは、親のための教育セッションとも言われます。もちろん本人に対しても支援をするのですが、保護者への教育やデモンストレーションの意味合いが大きいと思います。ここで特徴的なのは、非常に利用される方が多いものですから、そこだけで十分な支援ができませんので、期間内に達成可能な具体的な目的を設定して行われるということです。必要に応じてセッションを繰り返していくことになるのですけれども、TEACCHセンターのみで支援をすることは到底できませんので、学校や職場や家庭の中で支援ができるように、さまざまな機関へのコンサルテーションが行われます。また、専門家のトレーニングも大変重視しています。

就学前の子どものクラスルームは、一部のTEACCHセンターで行われています。これは専門家の教育ですとかデモンストレーションの意味合いも大きいと思います。

各センターには、自閉症の人たちのためのグループもあります。それぞれのセンターでいろいろなグループを持っていますが、学齢期の高機能の方たちのグループは、非常にニーズが高いようでした。

また、親御さんたちのためのサポートグループですとか、新しく診断をされた方や自閉症が疑われる方のために、先輩の親御さんたちがトレーニングを受けてサポートをするプログラムも開発されています。

そのほかにも、就労支援プログラムですとか、施設へのコンサルテーション、居住プログラム、あるいは医学部の精神科のドクターとの相談のクリニック、研究活動などが行われていることと、TEACCH直営のものだけではなくて、地域のさまざまな機関と連携して、自閉症の方の支援を行っているのが実態と思います。

ノースカロライナ州には幾つかのカウンティーがあるのですが、日本で言うところの郡になりますね、それぞれの郡の教育委員会で若干学校のシステムは異なっています。そして、ある程度の独自性を持っているようです。全体に言えるのはここに挙げたようなことなのですが、それでも今いろいろ変動していて、私が知っている情報と現在の情報が少し違っているかもしれませ

ん。

就学前の教育機関、幼稚園は、主に公立学校の中に併設されています。日本ですと、なかなかこの移行のところが難しいということもあるのですが、そういう意味では情報の交換は容易です。そしてこの時期から特別な学級を持っていることが多いのです。

それから小学校においては、特別な学級に最初は在籍して、その後通常学級に行くような高機能やアスペルガーの方も結構いらっしゃるようです。日本ですとなかなかこういうルートというのが難しいことが多いのですが、初めのうちの社会性が非常に未熟で通常学級のセッティングが困難な場合に、こういうことが行われているようです。

IEPミーティングは年に1回行われますが、このときには教師と保護者と関連するさまざまな方が参加できます。TEACCHのセラピストもここに参加して、具体的な支援の目標を立てることがあります。

自閉症スペシャリストというのは、トレーニングを受けた教師になるわけですが、日本でいうと特別支援のコーディネーターと巡回相談の方を足して2で割ったようなものだと思います。教師に対するコンサルテーションや、実際の支援についての助言をする立場になっています。以前はTEACCHが直営でコンサルテーションを行うことが多かったのですが、今は自閉症スペシャリストをサポートするというのも重要な役割です。

そのほか、歴史的にはTEACCH直営のクラスルームというのを幾つか持っていましたけれども、最近ではメインストリーミングの流れですとか、教育の中にさまざまな考えを入れるというような、そういう風潮の中で、TEACCHは直接的な関与から間接的な支援に回っていくことになりました。このあたりは現在でも変化をしているだろうと思います。

こういうようなシステムの中で、すべてがうまくいっているかというところを決してそうではなくて、ノースカロライナでも当然通常学級でうまくいかない方もいらっしゃるし、不登校になる方もいるようです。

ノースカロライナの学校システム

- ・ 就学前教育機関は公立学校の中に併設が多い
- ・ 特別な学級から、通常学級ということも多い
- ・ IEPミーティング
- ・ 自閉症スペシャリストの支援
- ・ メインストーリーミングの流れ
- ・ 様々な考え方
- ・ TEACCH部は直接的な関与から間接的な支援へ

TEACCHが行うことの中に、学校コンサルテーションというのがあります。先ほどお話しした自閉症スペシャリストが窓口になりますけれども、スペシャリストで対応できない部分には、専門的にTEACCHが支援をします。私自身も学校へのコンサルテーションに伺うことがありますが、特定の児童、生徒、その対応のことで終始したり、どうやって医療機関につなげるかということに関心が集中していたりする場合があります。TEACCHの場合には全体の底上げですとか、他の児童も含めてどういう支援をするのが望ましいかということを、より計画的に長期的なビジョンの中で支援を行っています。教師のトレーニングとそのフォローアップは、そういう意味でとても重視していることです。

専門家や教師のトレーニングは、主にトレーニングセミナーというものを通じて行われています。これは夏の間に5日間、25人ぐらいのメンバーを4、5人のグループに分けて、実際の自閉症の方に対応しながら学ぶセミナーです。その中で講義内容はここに挙げてあるとおりです。そのほかにも、セミナーやフォローアップのためのコンサルテーションが適宜なされています。こういうことを通じて、教育者や専門家のレベルアップを図っているわけです。

教師や専門家へのトレーニング

- トレーニングセミナー
実際の自閉症の人と関わるセミナー
講義内容
自閉症の特性、アセスメント、構造化された指導、
コミュニケーション、ソーシャルスキルと余暇、
行動マネージメント、自立と職業スキルなど
- セミナー、研修会
- フォローアップのためのコンサルテーションなど

本人への支援としては、非常にさまざまな方法が用いられています。TEACCHは特定の療育技法ではありませんので、特定のやり方というのはないのですが、ここに挙げたのは高機能の人たちへの支援としてよく使われるものです。さまざまな技法を使っているのがおわかりになると思います。年齢や問題点によっては、純粹にカウンセリング的な対応をすることもありますけれども、その場合にも高機能やアスペルガーの人の特性をもとに、文字や図や絵を使ったりして視覚的なサポートをしたり、具体的な援助を行うことが多いのです。

本人への支援として用いられる さまざまな手法

- 構造化された指導
- コミュニケーションのための援助
- リマインダーやルールの明確化
- ソーシャルストーリーズ
- コミック会話
- ワークブックによる指導
自己認知、コーピングスキルなど
- ソーシャルグループ
- その他

きょうは時間が限られていますので、そのうちの幾つかを御紹介したいと思います。

構造化された指導というのは、TEACCHで用いられる代表的な手法になりますが、これは機能にかかわらず使うことができます。もちろん通常学級の生徒さんたちにも応用が可能です。きょうは構造化の話はあまり詳しくはしないのですが、簡単な言葉で言ってしまうと、構造化というのは苦手な部分を補うことであり、意味の理解を援助する方法であろうと思います。例えば、ここでいうスケジュールというのは、自閉症の人にとって苦手なことである変化とか変更ですね。こういうものをなじみのある秩序の中で柔軟に対応できるように教えていく、そのための援助方法の一つになります。これらの方法というのは、理論的には実行機能の障害ですとか中枢性統合の問題や感覚情報処理などの、さまざまな困難さに対応するものであろうと思います。

構造化というのはとても効果的な手法である反面、誤解を受けやすいものでもあります。皆さんの中にも絵カードやつい立てをイメージされる方がいるかもしれませんが、文字が読めれば文字を使いますし、ノートや手帳を利用する方もいらっしゃると思います。その人の必要性に応じて、高機能の人には高機能の人なりの応用の仕方をするわけです。時々問題が生じるのは、主に従わせるために用いるからだろうと思います。個別化して柔軟に使わずに、画一的にこちらの意図に従わせようとしてやると、大抵は問題を生じることになります。

私は構造化をお話するときに、よく眼鏡の例えをするのですが、苦手なところを補うという意味では構造化は眼鏡に似ています。眼鏡自体はよくても眼鏡のレンズが合っていないとうまく使うことができません。また、眼鏡自体の操作が非常に難しければ、これは便利なものとは言えません。そして、高機能の人でよくあることとしては、あまり奇抜過ぎる眼鏡、これはかけたいというふうには思わないわけです。それから、眼鏡をかける人がとっても劣っている人だというふうにとらえたときには、これも眼鏡をかけたいとは思わないわけです。自閉症の人たち、高機能の人たちに構造化された指導を用いるときには、こういうようなことを考える必要があるだろうと思っています。

ます。

これは構造化の概念を利用した授業の流れを示すチェックリストの例です。皆さんの資料には載せていません。こういうものをその生徒に手渡した方がいか、黒板に書いた方がいかということになりますが、みずから情報を得て、自分でチェックしていくということからすると、その生徒自身が持っていた方がいかかもしれません。それから、時に生徒自身に書かせることもあるわけですが、書くことに困難を持っている方もいらっしゃるので、こういうものは大抵は書いて渡してあげた方がいいということになるでしょう。

チェックリストは、言葉の指示がよくわかる人たちにも役に立ちます。考えてみますと、言葉だけでは忘れてしまうこともありますし、そのときに聞けていないこともあります。また、変化や変更に対しては、言葉だけではなかなか納得ができないこともあります。リストを使うと、予測ができて整理されて確認ができるので、不安や心配が減ることになります。そして、フラットに並んでいる言葉としては、優先順位がわかりにくいのですが、順序性を示すこともできるようになります。一つ一つ指示すればできるのに、指示をしないとできないタイプの人にも、チェックリストを使うことで、自分で行うことを支援することができます。さらに、興味、関心、そういうものを入れることで、目当てや目的ができて、モチベーションを高めることもできます。高機能の方の多くは、いちいち指示されることはあまり好きではありません。そして、指示されるとなかなかそれを素直に聞けずに、対立が生まれたりすることもあります。注意や指摘がふえて争うというようなことが少なくなる、そういう効果も期待できると思います。

これは枠組みだけ示してありますが、この内容については幾らでも変えることができるわけです。なじみがあるルーチンのシステムを使って内容をいろいろ変更することができる、そうして柔軟性を教えることも可能になります。もちろん内容にどんなものを入れるかというのが一番重要であることは言うまでもないことだと思います。これを忘れてしまって、形だけまねをして内容は難し過ぎるとか、わからないということが時々起こってしまう。そ

うすると大抵はうまくいかないわけです。

構造化の意義について簡単にまとめてみました。理解できるとか意味がわかる、予測が可能、こういうことから不安や混乱を軽減しますし、精神的な安定や学習効果の増大をもたらします。みずから情報をとるための手がかりを与えることで、自立性が増し、自発的にできることが増え、般化にも役立つのです。そして重要なのが、指示や指摘が減って失敗も減ることで、自信が生まれ、自分に対して、そして他者に対して肯定的な感情をはぐくむことに役に立つということです。自閉症の人やアスペルガーの方の心とか人格だけをとり出して育てることは大変難しいですけれども、実際にわかるとか、できるとか、わかってもらえとか、信頼できる人がいることで、人格や心をはぐくまれていくのだらうと私は思っています。

コミュニケーションについても、さまざまな程度の障害を持っています。対人的な負荷を軽減すること、言葉や会話の困難さを補うことも支援になります。具体的には、台本を用いて会話の枠組みを教えていたり、視覚的な手がかりを用いて表現を容易にしたりすることがあります。思っていることや自分の状態について選択肢を挙げて、それにチェックしていくと、より表現が容易になります。スペースや空欄の利用も同じようなことです。そこに書き込んでもらうことで、どういうふうに表現したらいいかがわかりやすくなっていきます。コンピューターやメールを使うというのは、対人関係の負荷を減らす一つの方法です。そればかりでなく視覚的に残るということがありますから、後で振り返って確認をすることもできるわけです。

これはソーシャルストーリーを応用して、コミュニケーションのサポートとして選択肢を挙げてあるものですね。この方は1年生なのですが、授業中に抜け出してしまうのですね。先生が何度注意しても一向におさまらない。その理由を何とか聞き出そうと思ったのですが、どうしてなのと聞いても、こういう質問には大抵は「わからない」というふうに答えてしまうのですね。よく黙り込んでしまうこともあります。そういうときに選択肢を挙げておいて、それに丸をしてもらったり、括弧に書き込んでもらったりすることで表現を容易にしています。

この例では、予想に反して、「みんながうるさいから」というのを選んだのです。いろいろな対応を考えることがあると思うのですが、本人の思いと違った対応をすると当然効果を上げませんし、本人のせいにしてもあまり解決は図られないわけです。

そのほかに、社会的な知識や情報の提供をすることもあります。ここに挙げた方法は代表的なものです。コミック会話とかソーシャルストーリーズは、日本語のマニュアルも出ています。いずれも視覚的、具体的な方法を用いて、この抽象的な社会的な知識や情報を教えていく方法です。コミック会話は、簡単な絵ですとか吹き出しを使って、多面的な考え方を教えていたり、あるいは状況の再現が容易なので、コミュニケーションのツールとしても使ったりします。ソーシャルストーリーは、どうしても行動の修正とか指導のために使いがちなのですが、現在できていることを、それでいいというふうに肯定、承認するためにも使う必要がありますし、そのことで、要はだれにもそれでいいのかどうかを保証してもらえない子どもたちが、これでいいんだという確認をすることができます。

ワークブックもよく利用される方法です。TEACCHのセラピストが書いたものが日本語訳で間もなく出る予定ですが、単に社会的な知識や情報だけでなく、自己認知や他者との違いについても、これを使って教えることをよく行います。

これがソーシャルストーリーの例です。この子はピアノを習っていて、難しい曲をいつもいきなり両手で弾いてしまうのです。簡単なうちはよかったのですが、だんだん難しい曲になってうまく弾けなくなるとパニックになるのです。お母さんや先生は当然片手ずつ練習すればいいというふうにお話をするのですが、何度言ってもだめでした。このストーリーを読んだその日から片手ずつ弾くようになったということです。「多くの人は初めての曲やあまり練習していない曲は、はじめから両手で上手にひくことはむずかしいものです。でも、それはいけないことでもピアノがへたということでもありません。」恐らく、この子にとっては、ここの部分ですね、両手で一遍に弾けないのは、とてもピアノが下手だというふうに思っていたのでしょう。そ

れで、片手ずつ練習した方が、初めから両手で弾くよりもずっと早く弾けるようになるということを伝えたわけです。本人が何を思っていて、何にひっかかっているのかということに基づいて対応を考えないと、なかなか行動を修正することにはならないでしょう。

多くの子どもたちは、特別な興味や関心を持っています。ある子はポケモンですとか、電車や車の人もいるでしょうし、昆虫や恐竜などもよく興味や関心の対象になることです。これらのことは、モチベーションやストレスの予防やその対処に役に立ちますし、教室で教える内容ですとか、取り組む活動にこういうものをうまく組み入れると、その子にとってとても楽しく効率よく集中して、意味のあるものとして取り組むことができるようになります。これはどの子どもに対しても同じなのですが、自閉症やアスペルガーの人の特別な興味や関心を利用するということは特に重要だろうと思います。

そして、最後のところですが、興味や関心を通じて社会的な接触の機会をふやしたり、同じ興味、関心を持つ仲間を見つけたりすることも重要なことです。何を教えるかということに関しては、興味や関心を利用することももちろんですが、その子の発達のレベルですとか、機能的、実用的であることとか、さまざまなことを考えなければいけません。幾ら興味や関心があっても、難し過ぎたり、その子の発達段階に合っていないことであれば、なかなか教えることが難しいわけです。

TEACCHセンターでもグループの活動を実際に行っています。TEACCHセンターのグループ活動はソーシャルグループと言いますが、これはソーシャルスキルを教えるグループというよりは、楽しむためのグループと想っていただくといいかもしれません。

ただし、本当に高機能の人たちが楽しいグループを形成するには相当な準備が必要です。メンバーのマッチングのところから始まって、グループの大きさですとか、その個人の社会性のレベルがどうかとか、そしてそれぞれの子どもたちが集団の中でどういうふうにするとうまく振る舞えるのかということ进行分析していきます。

子どもたちへの支援も、同じ活動の中でそれぞれの子どもが違った提示の

仕方のスケジュールを持っていたり、グループ活動の前に、それぞれ違ったソーシャルストーリーを読んだりすることもあります。役割やルールの明示ですとか、待ち時間や順番の視覚化というようなことも行われていますし、活動そのものも構造化されていて、それらの活動というのは、1対1の場面で既に獲得したスキルを使ってグループ活動を行っていくことになっています。こういう活動は、本人たちにとって楽しい、うまくいく経験をもたらしますし、その中で仲間に出会うことやスキルの般化を練習していくことになります。多くの高機能の子どもたちは、通常学級にいるわけですが、その中であまりうまくいっていない子どもたち、そういう子どもがグループの中で楽しむことを経験していくことになります。そして、保護者にとっても、こういう子どもたちが楽しむためには、どのぐらいの準備が必要なのかということがわかる、そのことも重要な意味があるのだと、TEACCHのセラピストは言っていました。

ストレスへの予防的対処については簡単にお話ししますが、わかるとか意味があることそれ自体、それから選択するということですね。コミュニケーションとして伝えられること、感覚の調整、これらのことも予防的に働きます。また、さまざまなコーピングのためのスキルを教えていたり、支援として使うことがあります。これは、イライラの程度について視覚的に提示されたものの例ですが、こういうときにどういうふうにしたらいいかということを具体的な手法として書いてあります。小学校低学年では、まだ、なかなかこれらのものを利用して自分をコントロールすることは難しいのですが、その場合には環境的なことを中心に対応していきます。そして、毎日の生活の中にこれらのスキルを位置づけることや、予防的に指導することを重視しています。

クラスメートや本人に対して、「違い」について教えるということも行われます。日本人の場合は、どうしても違いがあると同じにしようというふうに働きがちですが、アメリカ人の場合には、同じクラスの中にいろいろな皮膚の色や髪の毛の色の人がいいますので、違いがあること自体が自然なことだというふうに思います。そして、言葉の理解やさまざまな困難さ、違いがあ

るということを教えていきますし、さらに進んで具体的なかわり方や特定の自閉症の生徒についてお話することもあります。これらのことについて、TEACCHのセラピストが先生をサポートしながら一緒にお話をしていくこともあります。

大事なことは、オン・ゴーイングのアセスメント、いろいろ支援をしながらアセスメントをすることであり、予防的にさまざまな支援を利用することですね。何か問題が起きた後に支援をしようとする、そういうものは自分を責めるものとか修正するものであるというふうにとらえてしまうことがあります。そして、支援を利用するというのは劣っていることではないのだという理解です。本人側の感じ方を大切にすることですね。さまざまな誤解をしていたりすることもありますけれども、その誤解が一体どういうことかということを抜きにしては、こちらの理論を押しつけてもなかなか本当の意味で改善することはできません。

私自身がTEACCHのスタッフから学んだことの中で、一番TEACCHの考え方を端的に示している言葉が、「自閉症の視点」という言葉です。自閉症と自閉症の人の持っている個人の特性を理解すること、個別化して考えること、そして自閉症の人の考え方と心を尊重して、自閉症の人の側に立って考えるということだろうと思います。このためには、支援者が画一的な考えではなくて、自閉症の人に対して柔軟な考えを持たなければなりません。そして、その上でお互いにうまくやっていく方法を考え、提供し、実践しなければなりません。実際にうまくいかなければ、やはり自閉症の人たちはとても傷ついてしまいます。さまざまな支援の理論的な方法よりは、この自閉症の視点ということが、非常に抽象的な言葉ですが、重要なことだと思っています。

自閉症の人の視点でみる

Autistic perspective

- ・ 自閉症の特性と個人の特性の理解
- ・ 個別化して考える
- ・ 自閉症の人の考え方と心を尊重する
- ・ 自閉症の人の側に立って考える

その上で、お互いにうまくやっていく方法を
考え、提供し、実践する

まとまりのない話になりましたけれども、私の報告は以上です。御清聴ありがとうございました。

(おかだ ゆうすけ)